家忠日記増補 十四

内閣文庫
和 書 類
三二四七八 號
三五 冊
一六三 函
三 架
(四一 冊)

477

内閣文庫
番號	和	32478
冊數		25(14)
函號	163	60

共廿五

国立公文書館 National Archives of Japan

1函ノ10

国立公文書館
National Archives of Japan

家忠日記追加巻之十四

自慶長五年正月至同年七月

内閣文庫

慶長五年庚子

正月小

一日 列候以下大坂ノ城西ノ丸ニ登テ大神君ニ謁シ新正ノ賀儀ヲ献ズ秀頼大坂ノ城本丸ニ在リ例ノ如ク朔旦ヨリ五日ニ至テ諸大名及ビ近習外様ノ面々城ニ登リ秀頼ニ謁メ各歳首ヲ祝ス

国立公文書館
National Archives of Japan

羽柴肥前守利長野心アルノ由去歳ヨリ此春ニ至テ巷説止ズ是ニ依テ　大神君利長ヲ疑ヒ給フ利長其御疑ヒヲ散ゼンガ為メニ利長ガ母芳春院及ビ家臣等ノ質ヲ江戸ノ城ニ指シ下スベキノ旨ヲ達ス是ニ依テ　大神君御疑心散メ交和成ル

二月大

七日　武州江戸ニ於テ　台徳院殿近習ノ士松平十三郎ガ馬ノ尾ニ鼠巣ヲ成シ子ヲ産

三月小

九日　大神君ノ御家人安藤九助次基川井市助ニ遺恨有テ次基獨リ川井ガ宅ニ馳入忽ニ川井ヲ刺殺ス川井ガ従士等競ヒ集テ次基ヲ撃ント欲ス次基其場ヲ遁ルルト云ヘドモ疵ヲ被テ遂ニ死ス　次基ハ帯刀直次ガ弟

秀頼信州善光寺如来堂ヲ修補ス去々年ヨリ信州木曽ノ桟朽損メ往来ノ通路自由ナラズ同ク伊奈ノ河橋モ破損ニ及ブ間兩所ノ橋此春奉行ニ命メ補續セラル

上杉景勝去ル秋本國ニ下ルノ後反逆ノ企アルノ由其聞ヘアリ是ニ依テ大神君景勝ヲ大坂ニ召テ其實否ヲ御糺明アルベキノ旨旧冬ヨリ 鈞命ヲ奉ルト云ヘドモ景勝 命ニ應ゼズ此春モ伊奈圖書ヲ以テ猶是ヲ召ス景勝益 命ヲ拒是ニ依テ大神君東國ニ御進發有テ速ニ景勝ヲ御征伐アルベキノ旨諸士ニ觸促サル

四月小

一日 大神君豊光寺ニ 命メ景勝ガ臣直江山城守兼續ガモトニ書簡ヲ遣ハシ

ヌ給フ

七月

阿部伊豫守正勝卒ス 六十歳 初名善右衛門ノ尉

其子阿部備中守正次 初ノ名善九郎 台命ヲ奉テ父ノ遺跡釆地五千石ヲ續テ書院番ノ隊長ヲ役ス松平忠明 奥平美作守信昌ガ四男 従五位下ニ叙シ下總守ニ任ズ安藤五左衛門ノ尉重信 初名彦十郎 従五位下ニ叙シ對馬守ニ任ズ

五月大

三月

直江山城守兼續ガ返簡大坂ニ来ル

今朔日之尊書昨十三日下着具ニ致拝見候多幸ゝゝ

一 當國之儀於京大坂ニ種ゝ雑説有之ニ付内府様不審之由尤ニ候併於京大坂ニ而さへ色ゝ巻説無止時ニ候況遠國と云又景勝若輩人と云似合たる雑説と存不苦候条ニ安まる

惡ニ而連々とかうせ卑下仕候事

一 兼勝上洛延引ニ付而逆意之虚説之儀有之由、旁以不審ニ候、去々年國替被仰付、其砌上洛仕、去秋九月ニ致下國、去正月ニ上京仕候而、如何ニ國制ノ上付而、就中會津表雪深、從十月至三月迄往来不自由ニ候、此段遠國案内ニて御尋候從正月ニ雜説之上洛延引仕候故ニ何者カ兼勝逆心と委細ニ存知申偏ニ不審ニ存候事

一 兼勝無二之心中ニ而、誓紙ニ而申上候、去ニ年以来數通之起請文を奉行ニ差出しと存候ニも御無詮事

一 太閤以来兼勝律義之仁与思召候而被下候今以少も疑無之事有間敷候

一 兼勝ニハ別心毛頭無之候得共讒者之虚

一 説共ニ糺明遂ヘき也、若不及是
非ん兼又共ニ如此ならハ讒者をハ罪
ニ可行、実否を遂ケ讒言人をも罪ニ行れ
私ニ致ハ、共ニ如此ニ成候、内府様
表裏ある人あるましき事

一 小国肥前守殿忠孝ヲ尽シ候而
尤威光を失シ候事

一 増右衛門大秋申候ハヽ申述珍重也梅ハ用

不ノ似おもふしきに候ハヽ、太閤様ニハ構武太ヲ
表裏ニ取次ニハ抗京勝遠ヶ座
統ニ纔ニ一旦ニ及異見も侍ニ
筋目又 内府様ハ忠節ニ一ヶ承
処ニ讒者ニ堀尾山城守かけ志ノ士役ニ
才覚ならんのぎゝ婚事ニ去方ハ子孫大
忠臣ノ侫臣ノ別ハ分別次第ニ可思
通可有事

一雑説第一上洛延引之説第二武具揃之
事上方武士も今焼炭計瓢たて
人和道具をも度候ては東国にも兵器
を専ニ相調へ候共国々にも風俗之
悪しからず富有あれ補にて縦令世上に世
にも支度候とも景勝か分限は雅なる
有へし小天下に似合はぬ沙汰なるへし
一第三道をも作り拓橋を付往還之煩無
からんにしはしたて抱国之没義にては無益
成ては外国へ拓橋を補続し険路を
作りては事測庭堅抱可被作堅抱歯
国々梅振には景勝本国を云多勢と
云可討果事はこれ見へ入候ては道
作り拓橋を付ふへし思ひ及ては景勝同
領越後之儀をは不及上野下野岩城
相馬正宗領寂上由利仙北へ相続仁

尚道作ハ彼是因縁ニして自余ニ餘を
志ハ共ニ相咎ハ以て婦嘆物計道
作りしに忽御仕る様にて虚説を成
しハ事武道をも存ハ無分別者と
云ニ愚者にて万事ニ於て不審有る間能
令帝勝對天下ニ逆意之企有るに於ては
諸方之境目切塞要害を構へ防戦ノ
支度を致す可仕ニ四方ハ道を作り要害

之険難と順路よ成し自他人数をも出
其向も一方ニ一ちゑ防ヘ難成とは
況諸方之拒ぎ争ふ事成間敷候令又
他邦ハ出勢して一方ハ一ちゑ帝勝相越ニ
人数成をも一の敵て諸所にて発向ありて
天下を治むるハ猶更逆心を企道を作り
船橋を掛け一ヶ方之事ニ至る迄
申く不及是非虚言を被ニ思召のよし

永勝領内通路橋ゟ付て神保清兵衛ニ被使者向ケ候ハヽ往来候処ニ年中稀成雪ニて被検使を被差下所ヽ境目ニ相子見分ニ被及付ものゝ相ニ会之事

一 其以等閑ニ罷有しんし後虚言ニ及相ミ候ものゝ他領ニ而催儲候ニ付相変し候ニ付高頼降参不仕候ハヽ来

一 三月これハ人数を差遣し候も虚言故ニ一笑

一 永勝当年三月ニ謙信追善ニ相当候ケ様之隙をあけ夏中ハ色々と沼て仕ニ而無之故ニて候ニ人数を集武具を調候を抱国ハ陣役ニ参在国中ニ相調候ニ付専用意仕候処ニ増右大形方より使者被相越

殊ニ亦勝逆心不隠便ノ條ハ出世別
心在速上洛也ト内府樫ノ門
意ニ候テ遂出仕雖令蕩人ノ
讒訴ヲ有根ニ社稷大臣乱所ヲ
しまつて無之態情之ニ候ヘ共乱所を
殊ニ其外只此上洛可仕ニ旨乱敵ニ
子ノ之方隔テ不及是非ニ候之遂逆心
と企之候之時節ニ而ハ不知顔ニ

為上洛仕或ハ当族ニ縁をも相或ハ
新知行を領し不義之恥をも顧
す人之交を仕候ケ様之当世風ニ亦ハ
勝ノ方上ニ不相應ニ候御心中ニ世
其心之ニ虚説之逆意天下ニ其名を
隠候辛労ニ上洛仕て累代相続之
弓箭之覚を失ひ可申候系譜事
とも所々会其外乱所をも上洛候

成月浦ニ於テ鏡景勝理リノ非ヲ正シ
可為通ニシテ又景勝ガ従者藤田能登守
ト云者去ル七月中旬当国ヲ出奔シ
江戸ヘ参向仕夫ヨリ上洛ニ及テ
縁彼者ト謀リ出シ其上ニ従ハ者
ク細ニ仰庭ヘ申シ景勝ガ野心ヲ
内府様ヘ表裏ヲ世ニ云ハシメ可申由
次第ノ事

一 千万句ヒ不入景勝ガ別心毛頭無之候
上洛不致候者此方ヘ手立ヲ被相構候家康
是非ニ不及上候 内府様御賢慮ヲ以テ
上洛可仕旨ニ付仰令ニ従ヘ此度西国ヘ太
閤ノ旨ニ背キ御掟数通ニシテ起請文ヲ反古ニシ
成シ幼君ニシテ秀頼ヲ見放シ 内府様
ニ野心ヲ挿ミ仮令天下ヲ盗ム共得
共悪名難遁ニテ末代ニ迄恥辱ニ候

此趣無遠慮別心可有之付は
この事あらは浮人にて虚言実
儀なる様思ひ過疑をかけて捉縛
詮を入可申事

一　承大坂ゟ之南勝ヶ逆心と申ごとく
お隣住人と会津合戦を謀り或は
城えは人数を籠兵粮を入或は境
目へ人質を捕置て新関を構へ候

て浮説騒動仕れは如此世ら別意之者
彼より家一紙に捨置へし不叶事

一　兼るて　内府様へは彼是御ことわり
なけれはかくて従隣国浮人頻に称
こし虚説を申成し家人を語らせ
我より叛逆歴然と可被思召処に
此者行をもてハ還而表裏者に
身一とつの御沙汰となる世に沙汰

冥府ニハ前右府ハ使者ヲ以テ日頃昵懇
其謀意ニテ通ハシ承リ不礼底存シ候ヲ
一 何事ノ儀ニ候ヤ遠国様子仕候ニ付衆
有様ニ付候ハ信越ニ於テ当世ニ付キ余情
ましき事ニ候ハ自然ニ実儀ニ
備シ候ニ於テ事ニ付テハ其上仁ニ候
是皆候ト云天下ニ黒白ヲ分チ候ハ
ニ候ニ付ル所ハ信越候者ナル事実
候ヲ以テ宜敷可有之様ニ存候両人ハ
かつて之是非ヲ申候ハヾ何レ共存不
顧其ノ場ニ於テ侍者養生可申候敬白

四月十四日

豊光寺 侍者中

直江山城守 兼続

七月 大神君景勝御征伐トメ東國ニ御發向ノ事暫ク御延引可然カノ旨大坂奉行ノ面々訴状ヲ献ズ

一 迚秀頼被取立候ハゝ衆上方より
掟御座天下静謐ニ可被仰付遠国
衆へ入魂之儀は有之候ても諸大名を被召遣
被加御下知候とも有之間敷事

一 各思意之趣聊憚多有之候は其自然
ニ諸大名不和之儀出来候刻は如何様ニ
被成可然程御契被入候得者
出候共今度中江之儀ニ不及

相殿被立腹尤至極ニ存候得者名誉直
江候他国之人与交を不致誠之田舎
者りん不知手礼儀をも不調法成故
候ては何事中被加御遠慮とも後

一 其景勝不存候て不来奉存候猶
右之趣申候事

一 太閤薨去以後如何程被出入候
皆々賢慮前尾相調候間此度今度

家康為御征伐与東国ニ御下向被成候ニ付
将又御令早速思召立候ニ付
付しく玉ひ候て瑕瑾与申ハ毒なき事
一第一秀頼公御幼稚ニ被成候所を大坂ニ
御座城被成候事ニ付 御仕置等
諸人無心元存候故 此度東国御出馬
おゐて若も秀頼公を可見放しと申も
諸人推参一往ニ而御急可然事ニ候

御遠慮被成候而可被達御上聴候事
なき事
一先ニ御兵粮山道之従諸大名方
不作仕候ニ付事ならず飢饉ニ被成候ニ
野兵粮ニ候而如何ニ御座候ハヾ又摂前ノ
衆ハ働候而諸人ハ下りて申候ニ付末春ニ而
可為者叶ハバ被成候事

五月七日

長束大蔵大輔

増田右衛門尉
徳善院玄以
中村式部少輔
生駒雅樂頭
堀尾帶刀
九日　羽柴肥前守利長ガ母芳春院及ビ家
臣前田對馬守横山山城守太田但馬守山
崎長門守等ガ予共各今日伏見ヲ發メ武

州江戸ニ赴ク
六月小
六日　保科彈正ガ女ヲ以テ　大神君御
養女トシテ黒田筑前守長政ニ嫁セシメ
給フ此日羽柴利長ガ母及ビ家臣等ガ質
江戸ニ至ル
十一日　大神君景勝御征伐トメ東国會
津ニ至テ攻入ルベキ其軍列ヲ定メシメ

給ノ白川口ハ會津ヨ八十里ヲ隔ニ　大神君
台徳院殿両君信夫口ハ大嵜ヨリ將正宗米
澤口ハ會津ヨ二十里隔最上出羽守義光津川口
ハ羽柴肥前守利長ヲ先陣トメ羽柴久太
郎秀治村上周防守溝口出雲守等ヲ是ニ
向ハシメ給フ七月廿一日各會津ニ至テ
大手搦手一同ニ乱入スベキノ旨兼テ諸
將ニ　命ゼラレ

十六日　大神君大坂ノ城ヲ御首途有テ
東國ニ御進發アリ此日伏見ノ城ニ著御
十七日　大神君伏見ノ城ニ御滞座伏見
ノ城主トメ松平主殿助家忠鳥居彦右衛
門尉元忠内藤弥次右衛門尉家長松平五
左衛門尉近正ヲ以テ伏見ノ城ヲ守ラシ
メ給フ　大神君四人ノ將ヲ各御前ニ召
テ　命有テ曰石田三成ガ所行御疑心ア

リ是ニ依テ今度當城ノ警衛其器ヲ撰ル
汝等ソレ是ニ當レリ依テ此ノ城ヲ守ラシ
ムル間懈ル事ナカレ深ク謀テ勇ヲ勵
シ忠義ヲ盡スベキノ旨台命ヲ蒙ル是
武門ノ面目ナリ又援兵トメ若狹ノ羽林
ヲ加ヘラル
十八日大神君伏見ノ城出御京極宰
相高次大津ノ城ニ於テ饗膳ヲ献ズ于時

大神君高次ヲ御前ニ召テ御脇指吉光ヲ賜
ル高次ガ家臣御前ニ出デ大神君ニ謁
ス各祿ヲ賜ル羌アリ石部ニ着御アルノ
処ニ水口ノ城ニ於テ饗膳ヲ献ジ度ノ旨
長束大藏丈夫石部ニ来テ達ス長束丈夫
ヲ御前ニ召テ御脇指ヲ賜テ退出ス其夜
ノ戌ノ刻ニ不圖石部ヲ出御有テ夜中
ニ水口ヲ通リ過サセ給フ是ニ依テ長束

ガ支度相違入
十九日關ノ地藏ニ着御
二十日四日市場ニ着御其夜船ニ乗メ
三州佐久ノ島ニ御着船アリ田中兵部太
輔長正此処ニ於テ饗膳ヲ献ズ
廿一日御船ヲ篠島ニヨセラル此日吉
田ノ城ニテ池田三左衛門尉輝政饗膳
ヲ献ズ

廿二日白須賀ノ驛ニ着御
廿三日晝濱松ノ城ニ於テ堀尾信濃守
忠氏晝餉ヲ献ズ父ノ帯刀吉晴越府ニ在
リト云ヘドモ爰ニ来テ大神君ニ謁ス
于時吉晴暇ヲ賜テ越府ニ赴ク　大神君
此日中泉ニ着御
廿四日晝佐夜ノ中山ニ於テ山内對馬
守一豊午炊ヲ献ズ其夕島田ノ驛ニ着御

六五日　駿府ノ城二ノ丸中村式部少輔一氏ガ家臣横田内膳正ガ宅ニ入御アリ式部少輔一氏肩輿ニ助ケ乗セラレ御前ニ候シ大神君ニ謁シ一氏重病タルニ依テ今度會津御進發ノ供奉セザル事是死後ノ遺恨ナリ愚子一學幼年タルノ間一氏ガ弟中村彦左衛門尉ヲ隊長トシテ一氏ガ軍勢ヲ相副ヘ會津ニ至テ供奉セ

シメント欲スルノ旨ヲ達ス一氏重病タルニ依テ言語分明ナラズ良有テ一氏新村加兵衛尉資良大藪新八郎小倉忠右衛門尉等三人ヲ左右ニ携言テ云ク是新村加兵衛尉資良彼レガ父新村筑後守資則ハ江州新村ノ城主タリ元亀元年ニ織田信長ト兵ヲ締ビ勇ヲ振ヒ術ヲ盡スト云ヘドモ信長多勢ヲ卒メ攻撃ノ間資則遂

ニ利ヲ失ヒ城ヲ避テ遊客ノ身トナリ江
州ニ蟄居ス資則武名アルニ依テ一氏是
ヲ招ク是ヨリ先キ一氏ガ姪ヲ以テ資則
ガ子加兵衛尉資良ニ嫁セシム一氏婚縁
タルニ依テ最モ是ヲ慇懃ニス時宜ニ依
テ御家人ニ属セシメ奉仕セン事ヲ願フ
ノ由一氏伏メ鈞命ヲ伺フ　大神君命
有テ曰資良ガ武名兼テ　台聴ニ達ス其ノ

上一氏ガ婿縁タルノ間自今以後資良幕
下ニ属シ軍忠ヲ励スベキノ旨　台命ヲ
蒙リ即資良ヲ御前ニ召シ始テ　大神君
ニ謁シ是ヨリ資良御家人ニ属ス（其ノ後江州蒲生郡ニメ食禄ヲ賜ル于時　鈞命ニ依テ新村ヲ志村ニ改ム）又大藪新八
郎小倉忠右衛門尉モ資良ト同ク麾下ニ
属ス
卅日　大神君清見寺ニ著御

一十六日　沼津ノ城ニ於テ中村彦左衛門
尉饗膳ヲ献ズ大久保相模守忠隣本多佐
渡守正信等此驛ニ迎ヘ奉テ　大神君ニ
謁ス此日三島ニ着御
一十七日　小田原ニ着御
一十八日　藤澤ニ着御
一十九日　鎌倉ニ　台駕ヲ寄セラレ鶴岡
八幡宮ニ御社参有テ修造ノ事ヲ　命ゼ

ラル

七月大

今度大神君會津御進發ノ供奉トシテ東
國ニ馳下ルノ輩福島左衛門太夫其子福
島刑部太輔并福島掃部頭池田三左衛門
尉并池田備中守羽柴越中守本名細川其子羽
柴與一郎京極侍従伊賀侍従筒井浅野左京
太夫田中兵部少輔其子田中民部少輔堀

尾信濃守山内對馬守有馬玄蕃頭中村彦
左衛門尉藤堂佐渡守加藤左馬助黒田甲
斐守蜂須賀長門守生駒讃岐守寺澤志摩
守冨田信濃守古田兵部少輔稲葉藏人織
田有楽其子織田河内守金森出雲守徳永
左馬助九鬼長門守分部左京亮古田織部
正小出遠江守市橋下總守桑山相模守亀
井武藏守古河伊豆守船越五郎右衛門尉

佐々淡路守池田備後守天野周防守佐藤
三河守佐久間河内守三好爲三同姓新右
衛門尉津田小平次神保長三郎水野河内
守秋山左近大夫中川半左衛門尉丹羽勘
助鈴木越中守兼松又四郎長谷川甚兵衛
尉森惣兵衛尉柘植平右衛門尉別所孫次
郎村越兵庫頭山岡道阿弥等各　大神君
ノ驥尾ニ從ヒ追々御跡ヨリ東國ニ馳下ル

五日大谷刑部少輔吉継越前国敦賀ヲ
發メ東国ニ赴ク既ニ江州佐和山ニ至ル
石田治部少輔三成去年ノ春ヨリ佐和山
ニ閑居スルノ間大谷石田ヲ携ヱ東国ニ
發向セント欲スルノ処ニ石田大谷ヲ閑
所ニ招テ今度大神君東征ノ弊ニ乗メ
吾謀反ヲ企ント相計ノ由ヲ竊ニ議ス大
谷聞テ掉頭メ云ク今世ニ大神君ニ敵

對兵ヲ締バン事石ヲ抱テ渕ニ入ルニ似
タリ汝ハ去歳諸人ニ悪マレ既ニ以テ殺
害ニ及ブノ時大神君ノ大仁ニ依テ一
命ヲ助ケラル忽ニ其厚恩ヲ忘レテ逆意
ヲ企ン事道ニ非ト強テ諫ルト云ヘドモ
石田聴カズ大谷諫カ子テ佐和山ヲ出テ
濃州垂井ノ宿マデ往クト云ヘドモ連年
旧友ノ好ミ捨難キニ依テ垂井ニ三日逗

留ミテ平塚因幡守ヲ以テ言ヲ盡シテ相諫
ル石田曽テ許容セズ大谷石田ガ密事ヲ
聞テ是ニ與セザルハ旧友ノ道ニ非ズト
謂テ此月十七日垂井ノ宿ヨリ佐和山ニ
歸テ遂ニ石田ガ逆意ニ一味ス
今度石田治部少輔三成ガ叛逆ニ與シテ大
坂ノ城ニ馳集ルノ軍勢毛利右馬頭輝元
毛利甲斐守秀元備前中納言秀家浮田久留
米侍従秀包藤四郎立花左近将監柳川侍従宗對
馬守侍従吉川駿河守堅田矢部少輔長曽我
部宮内少輔高橋主膳正穐月三郎築紫上
野介五島大和守毛利民部大輔高田河内
守藤懸三河守早川主馬助生駒修理亮生
駒主殿助竹中伊豆守肥部土佐守横濱民
部少輔奥山雅樂助多賀出雲守杉若主殿
助谷出羽守山崎左馬助同姓左京亮赤松

上野ノ故川尻肥後ノ守木下左京ノ亮脇坂中務ノ
大輔等都合其兵九萬三千七百餘騎大坂
ノ城ニ競ヒ集ル是ヨリ後大坂ノ城ニ馳
加ル軍勢数萬騎アリ
七月 大神君御書ヲ屋代左衛門尉勝永
ニ賜ル
一加賀中納言殿小国筋と米沢ハ打而
會津江乱入しく案内者に申先手ハ山形
出羽ゟ中納言殿ハ為旗本事
一西国以下之仕置中納言殿へ被仰付候
間心得可申候事
一越後侍従ハ津川筋ゟ出陣之以其勢
相ニ可残候由上ゟ一ト手ハ萬又村上周防守
溝口伯耆守両人ハ同前向寄次第一人ハ米沢
加案内者小国筋へ可為参陣事
七月七日
家康

慶長九年附とのく

十四日石田三成使ヲ大津ノ城ニ遣シ賀ヲ請フ城主京極宰相高次元来大神君ニ志ヲ通ジ忠ヲ竭サント欲スルノ間三成ガ使ニ應ゼズ三成大ニ怒テ其儀ニ於テハ戰場ノ首途ニ大津ノ城ニ兵ヲ發メ先ヅ此城ヲ拔ント其軍列ヲ定ム毛利宰相秀元ヲ大手ノ首將トメ其兵三萬餘騎勢田ヨリ向ハシム備前中納言秀家ヲ搦手ノ首將トメ其兵二萬騎關寺ヨリ相向大谷刑部少輔吉継父子三人其兵三千餘騎唐崎濱ヨリ乱入スベキト相議メ大坂ノ城ヲ發メ既ニ大津ノ城ニ赴ント欲ス于時大谷刑部少輔吉継謂テ云ク今度　大神君ト兵ヲ締ブ事秀頼ヲ天下ノ主タラシメンガ為也然ルニ京極高次

ハ等閑ナラズ御一族タリ秀頼幼主タリ
ト云トモ下トメ我意ニマカセ上ノ門葉
ヲ撃シ事後難免ル所ナシ今暫ク遠慮ヲ
廻ラスベキノ旨ヲ議ス大坂ノ諸將等各
此儀ニ同メ朽木河内守ヲ使トメ大津ノ
城ニ指遣シ謂テ云ク不慮ニ干戈ヲ起ス
事是全ク身ノ為ニ非ズ君ノ為也然レバ
高次質ヲ大坂ノ城ニ篭置キ秀頼ニ軍忠

ヲ盡サン事最モ本意タルベシ若此儀ニ
同意ナキニ於テハ止ム事ヲ得ズ兵ヲ發
メ大津ノ城ヲ攻落スベシト衆議一決ス
ルノ由使數度ニ及ブ高次聞テ掉頭メ云
ク勿論秀頼ノ大事タルニ於テハ何ノ異
儀カアラン是ハ三成ガ君威ヲ借テ己ガ
意趣ヲ達セント謀ル然ルニ於テハ不義
ノ三成ニ與メ大神君ニ兼約ノ忠志ヲ

変ゼン事沙汰ニ及ハズ大坂ノ多勢此城ニ寄来ルニ於テハ城ヲ堅ク守テ是ヲ拒グベシ若シ軍ニ利ヲ失フノ時ハ城ニ火ヲ放テ自殺スベシト謂テ高次敢テ千成ガ旨ニ従アハズ于時家臣等高次ヲ諫テ云ク一旦偽リ謀テ千成ト和メ質ヲ大坂ノ城ニ遣シ東国ノ安否ヲ聞テ後旗ヲ揚ゲ勢ヲ発シ大坂ノ城ヲ攻撃シ事是敵ヲ謀リ家ヲ全スルノ思慮タルベシト強テ諫ルニ依テ高次此儀ヲ聴テ愛子熊麿丸于時八歳及ビ家臣四人ノ子ヲ質トメ大坂ノ城ニ指遣ス是ニ依テ交和成ル

十五日　石田三成使ヲ伏見ノ城ニ発メ城ヲ避テ開キ渡スベキノ旨ヲ説シム松平主殿助家忠内藤弥次右衛門尉家長鳥居彦右衛門尉元忠松平五左衛門尉近正

四人ノ守将等是ヲ聞テ　大神君ノ幕下豪士多キガ中ニ其知謀武勇ヲ撰レ此ノ城ニ留メ置ル勇将トメ上方ノ多勢ニ臆メ城ヲ避テ開キ渡スヤウヤアル東兵ノ守ル城近国ニ於テハ此ノ一城タリ攻テ東兵ノ武勇ヲ試ヨト返答メ松平主殿助家忠鳥居彦右衛門尉元忠ト相議メ伏見ノ城下ヲ焼払テ堅固ニ城ヲ禦ギ守ル

十七日　大神君御留主居トメ大坂ノ城西ノ丸ヲ守ラシメ給フ佐野肥後守大坂ノ城ヲ避テ伏見ノ城ニ相加ル是ニ依テ三成諸将ト議メ毛利輝元ヲメ西ノ丸ヲ守ラシム　大神君ノ麾下ニ属メ東国ニ供奉スル諸将ノ室家ヲ大坂ノ城本丸ニ捕リ入ル羽柴越中守忠興ガ室城下ニ在リ三成使ヲ遣シ城ニ入レシト請ノ忠興

ガ宅地城下ヲ去ル事遠カラズ依テ城中ニ在ルニ同シ宅地ヲ改メズ指置ルベキノ由忠興ガ妻再三言ヲ盡メ相断ルト云ヘドモ三成曾テ許容セズ其日黄昏ニ及デ数百騎ノ軍士ヲ発メ室家ヲ奪ヒ取テ城中ニ入レント欲ス忠興ガ妻女明知日向ノ守光秀女ガ是ヲ聞テ勇士ノ妻トメ敵ニ因レ恥ヲサラサン事貞女ノ道ニ非ズ其ノ慮アルベキノ旨三人ノ臣河北石見守稲留伊賀ノ守小笠原勝斎等ニ下知ス三臣聞テ忠興関東下向ノ時自然此表騒動ノ事アルニ於テハ妻女ニ恥ヲアタヘザル様ニ相計ルベキノ旨ヲ奉ルノ間心ヲ安スンゼラルベキノ由ヲ答ル既ニメ大坂ノ猛勢忠興ガ宅地ノ四面ヲ圍ム室家十歳ノ男子八歳ノ女子ヲ左右ニ携ヘ謂テ云ク汝等ガ

祖父明知日向守光秀信長ヲ殺スル不義ノ因果忽ニ子孫ニ報テ今此ニ横死ス幼稚ノ心ニモ此理ヲ聞テ恨ムル事ナカレト諫メ含テ二人ノ子ヲ刺殺シ妻女モ同ク自殺ス小笠原勝齋長太刀ヲ以テ是ヲ介錯シ家屋ニ火ヲ放テ小笠原勝齋及ビ川北石見守一所ニ於テ自殺ス稲留伊賀守ハ其期ニ及デ逐電シ行方ヲ知ラズ忠興ガ妻自殺スルノ後ハ三成是ニ懲テ諸将ノ妻子ヲ城ニ捕入ル事ヲ止ム

十八日大坂ノ多勢其攻口ヲ定伏見ノ城ヲ圍ム城ノ大手西南ノ方ハ島津兵庫頭安藝宰相對馬侍従右護屋丸東南ノ方ハ備前中納言松ノ丸北東ノ方ハ筑前中納言城ヨリ西ノ方ハ鍋島信濃守其外諸方ノ寄手ニ相加ル軍勢立花左近将監

築紫上野ノ介穐月長門ノ守相良宮内ノ少輔木
下右衛門ノ大夫吉川駿河ノ守毛利豊前ノ守久
留米藤四郎高橋主膳ノ正有馬修理ノ大夫長
曽我部土佐ノ守織田左衛門ノ佐木村伊勢ノ守
毛利河内ノ守猪子内匠杉若越後ノ守杉若藤
二郎桑原甚左衛門ノ尉早川主馬ノ助熊谷半
次郎太田飛騨ノ守毛利伊豫ノ守伊藤弥吉郎
平戸法印伊藤民部ノ少輔岡田助三郎水吹

大和ノ守糟屋内膳ノ正雜賀孫一郎岡田孫平
次松浦伊豫ノ守矢部豊後ノ守伊藤加賀ノ守駒
井中務ノ大輔石川掃部ノ頭木下備中ノ守福原
右馬ノ頭後藤大和ノ守木村揔右衛門ノ尉南条
中務ノ少輔増田右衛門ノ尉ガ從士福田源次
郎大岡作左衛門ノ尉高田小左衛門ノ尉長束
大蔵ノ少輔ガ從士伴五兵衛ノ尉堀田圖書頭組
木下周防ノ守鉄炮輕卒ノ頭伊熊源助鉄炮輕卒ノ頭伊藤

弥吉鉄炮軽卒ノ頭大島雲八郎弓軽卒頭秋田助左衛
門尉旗大将十萬餘騎伏見ノ城ヲ囲ム城ニ
楯籠ルノ守将鳥居彦右衛門尉元忠内藤
弥次右衛門尉家長佐野肥後守本丸ヲ守
ル松平主殿助家忠松平五郎左衛門尉近
正西ノ丸ヲ守ル駒井備之助治部少丸ヲ
守ル甲賀佐左衛門尉岩間兵庫頭名護屋
丸ヲ守ル上林竹菴大皷丸ニ加リ守ル寄

手ノ多勢城ヲ囲デ攻撃ツ城兵堅ク是ヲ
拒ギ守ル
大神君台徳院殿両君景勝御退治トメ會
津ニ御發向ノ軍令ヲ諸士ニ下シ給フ

軍法

一喧嘩口論堅停止之若於違背
不論理非双方可為成敗且或傍輩
或依知音之好令荷擔者於人數

曲事ニ候、急度可為誅戮、若令用捨
者、縦雖相聞後日ニ、主人之可為曲事

一 先手ニ不断物見を出候儀停止之事

一 先手を差越、縦雖有高名、背軍法
上ハ可為曲事

一 無子細他之備へ相交者於有之ハ
武具取へし、若於其者自然其主人及
異儀ハ、共ニ可為曲事、但於有其

を其備へ相理、可通事

一 人数押之時、不寄脇道傍ニ付差
猥ニ通れニ付てハ、可為成敗事

一 諸事奉行人之差図を令違背者、其
可為成敗事

一 時之可為使、縦如何様之人と雖為親類
不可見相背事

一 持鑓之可為軍役、其外ハ図長柄可持事

事喝ソ無用也但長柄ハ見合持セ候人
ハ格別ニ可為一行事
一 於陣取放火候者可為曲事
一 小荷駄押之儀相交軍勢陣場押以下
一 下付若猥相交者可加成敗事
一 諸商売押買狼藉堅停止之上若於違
背之輩見合次第可為成敗事
一 船渡之儀ハ一手越支ル下知次第事 付

他之備へ相交候ハ一切停止之事
一 軍役之外人数ハ何ほとにても嗜次第
尤也ましく候自分可召連并武具以下
可致油断相嗜不申仍時ニ叶よき事
右條々堅可相守者也
慶長五年七月日
十九日 台徳院殿景勝御征伐トメ江城
ヲ御進発アリ供奉ノ輩結城少将秀康松

平下野守忠吉羽柴藤三郎秀行蒲生松平下総守忠明井伊兵部少輔直政榊原式部大輔康政本多中務大輔忠勝眞田伊豆守信幸石川玄蕃頭松平飛騨守仙石越前守山川民部大輔日根野徳太郎等都合其兵六萬九千三百餘騎御佳例タルニ依テ榊原式部大輔康政ヲシテ先驅ニ定ラル先陣既ニ佐久太田原ニ進ムノ時後陣ハイ〻

夕古河栗橋邊ニ充満ス

此日勢州表ニ兵ヲ發スル大坂ノ逆徒等安藝宰相其臣宍戸備前守長束大蔵大輔長曾我部宮内少輔安國寺吉川駿河守山崎左近大夫蒔田権之助松浦安大夫等三萬餘騎関ノ地蔵安野ノ津ノ邊ニ陣ヲ張ル

廿日丹後国田邊ノ城ハ　大神君ノ御味方ト〆永岡玄旨楯籠テ軍忠ヲ勵サン

ト欲ス石田三成ガ下知ニ依テ小野木縫
殿助谷出羽守生駒左近太夫藤懸三河守
小出大和守杉原伯耆守等数千騎ヲ卒メ
田邊ノ城ヲ攻ント欲ス玄旨豫メ此告ヲ
聞テ久見ノ城ヲ避テ田邊ノ城ニ楯篭リ
堅ク守テ是ヲ拒グ
廿一日大神君會津御進發トメ江城ヲ
御首途此日鳩谷ニ着御

廿二日大神君岩付ノ城ニ着御此日ヨ
リ上方静ナラザルノ由風聞アリ
廿三日大神君古河ニ着御
廿四日大神君野州小山ニ着御石田治
部少輔三成叛逆ノ由此所ニ至テ註進ア
リ是ニ依テ諸大名小山ニ馳集ル于時
台徳院殿ハ宇津宮ニ御陣座アリ
大神君小山ノ御陣営ニ上方ノ諸将ヲ召

ヲ美膳ヲ賜リ井伊兵部少輔直政本多中
務太輔忠勝及ビ山岡道阿弥岡野江雪斎ヲ
御使トメ命有テ曰先ヅ景勝御征伐有
ルベキカ是ヲサシヲカレ上方ノ逆徒等
御退治然ルベカランカ各心底ヲ残サズ
言上スベシ又上方ノ諸将ハ皆以太閤秀
吉ノ厚恩ノ者也其上石田三成ト旧友ノ
好ミ有テ彼レニ與メ秀頼ニ志アラン輩

ハ吾聊モ是ヲ遺恨トセズ暇ヲ乞テ大坂
ニ馳上リ逆徒ト同意スベキノ旨ヲ命
ゼラル諸将暫ク此返答ニ遅々スル時福
島左衛門大夫正則黒田甲斐守忠政ガ云
ク各妻子ヲ質トメ大坂ノ城ニ捨置キ麾
下ニ屬メ東国ニ発向スルノ上ハ誰カ独
トメ其忠志ヲ変メ今以テ三成ニ與セン
又景勝御征伐ノ事ハ暫ク御延引有テ先

ツ上方ノ逆徒等ヲ御退治然ルベカラン
カノ旨憚ル所ナク言テ左右ヲ顧ルノ処
ニ諸将各異口同音ニ此ノ趣宜シカルベキ
ノ旨ヲ申上ル御評議数返ニメ遂ニ先ヅ
上方ノ逆徒御征伐アルベキニ決セラル
真田安房守昌幸次男左衛門佐文字大谷
刑部少輔吉継ガ縁類タリ又叛逆ノ長本
人石田治部少輔三成ト連年朋友ノ好ミ

シ深ス是ニ依テ宇津宮ニメ暇ヲ乞テ逆
徒ニ相加ラント欲ス　台徳院殿数回是
ヲ制止シ給フト云ヘドモ　命ニ従ハズ
遂ニ本国ニ帰テ逆徒ニ與メ旗ヲ揚ル嫡
子伊豆守信幸ハ本多中務大輔忠勝ガ縁
者也故ニ以前ヨリ　大神君ニ忠義ヲ竭
サント欲スルノ間老父昌幸ヲ背テ
大神君ノ幕下ニ属ス　大神君彼レガ忠

志ヲ褒ゼラレ御書ヲ信幸ニ賜ル

今度安房守被存御不ニ日比之儀とも相違
被存て其方奇特之方ニ候相如依緩当候
何し召六親具ニ候以ニ謹言

七月廿四日　家康

真田伊豆守とのへ

三州苅屋ノ城ヨリ小山ノ御陣営ニ飛脚
到来ス其註進ノ書ニ云ク七月十九日水
野和泉守忠重三州池鯉鮒ノ駅ニ於テ不
慮ノ変有テ遭害ス其故ハ堀尾帯刀吉晴
野心有テ忠重及ビ加々野江弥八郎ヲ殺
スト云云是ニ依テ吉晴ガ嫡子信濃守忠氏
ヲ小山ノ御陣営ニ召テ既ニ忠氏ヲ擒ニ
セントス台徳院殿彼レガ少年ヨリ仁心
義ヲ乱サヾル事ヲ知リ給ヒテ假令父叛
逆有リト云トモ其子是ニ与セズンバ争

カ同罪トセントト暫ク其罪ヲ宥置カル、
処ニ忠重ガ家臣等カナテ子細ヲ註進
メ云ク堀尾帯刀吉明遠州濱松ヨリ越前
ノ府ニ赴クニ三州ヲ過ル水野和泉守忠
重堀尾ト志深ノ朋友タルニ依テ居城刈
屋ヨリ池鯉鮒ノ驛ニ出向テ忠重堀尾ヲ
享ス然ル処ニ又加々野江弥八郎来會ス
漸ク酉ノ刻ニ及テ堀尾沉酔睡眠スルノ

間ニ加々野江水野ヲ殺ス（于時水野六十歳）堀尾
是ニ驚キ目覚テ脇指ヲ以テ加々野江ヲ
刺殺ス水野ガ家人等主ノ敵ハ堀尾ナル
ト思テ其席ニ乱入メ堀尾ヲ切ル事数箇
所堀尾燈ヲ明ニシ聲ヲ放テ断ルノ間水
野ガ臣鈴木與八郎是ヲ制シ止ム其間ニ
堀尾ガ従者室内ニ馳入リ吉晴ヲ抱キ取
テ肩輿ニ助ケ乗セ池鯉鮒ノ驛ヲ去ル加

々野江ガ所行其意趣ヲ知ラザルノ由ヲ
註進ス此事全ク堀尾ガ不義ニ非ズ堀尾
勇ヲ振ヒ水野ガ敵加々野江ヲ撃ツノ間
翌朝　大神君其子堀尾信濃守忠氏ヲ召
テ又ガ武勇ヲ褒ゼラル　和泉守忠重ガ嫡
子水野六左衛門尉勝成小山ニ在リ
大神君勝成ヲ召テ又忠重ガ遺跡三州苅
屋ノ城ヲ賜リ　命ニ依テ勝成小山ヲ發

〆苅屋ニ赴ク于時　大神君忠重ガ三臣
ニ御書ヲ賜ル

和泉守殿不慮之仕合ニ而被相果不及是非ニ候
就夫六左衛門尉先段以而和泉守跡ニ不相
替致相続肝要ニ候恐々謹言

七月廿五日　家康

上田清兵衛とのへ
松本次兵衛とのへ

同人宛来よく

六七月　真田伊豆守信幸今度麾下ニ属スル忠儀ニ依テ　大神君ヨリ本領安堵ノ御書ヲ賜ル

今度安房守別心之処ニ其方被致忠節候
儀寔以神妙ニ候然者小県之事親ノ
跡ニ候之間無異儀可被遣候上ハ何
分ニも可被立之候条無如在可被励候

受候仍如件
慶長五年七月廿七日　家康
真田伊豆守との

六八月　上方ノ逆徒退治ノ命ヲ奉テ
諸将小山ヲ発メ江戸ニ至ル

晦日　先月ヨリ逆徒ノ多勢伏見ノ城ヲ圍テ矢ヲ放チ炮ヲ飛メ殷敷攻撃ト云ヘドモ城ニ籠ル所ノ軍勢義ヲ守テ命ヲ軽

ゴ勇力撓マズ氣屈セズ拒ギ戦フノ間寄
手数萬ノ多勢タリト云ヘドモ城ヲ抜ク
事ヲ得ズ鉄炮ヲ以テ城ヲ破ラント欲メ
四面ノ寄手雨ノ降ルガ如ク鐵炮ヲ城中
ニ放チ入ルノ間城壁ヲ打破ル事籠ノ如
クニス然レドモ城中能ク是ヲ拒グ城中
城下戦争ノ聲天ヲ響シ地ヲ動カス夜ニ
入江州長原ノ族敵ニ内應メ深尾清十郎
ガ守ル所ノ松ノ丸ヨリ筑前中納言秀秋
ガ軍勢ヲヒキ入レ城中ニ火ヲ放ツ

内閣文庫

国立公文書館
National Archives of Japan

国立公文書館
National Archives of Japan

国立公文書館
National Archives of Japan